



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3770 号 2017.7.13 発行

すべての人にすてきな明日を 障害児の母の会「K i s s A」 奈良県内で情報交換会

産経新聞 2017年7月12日

障害のある子供を育てる母親が悩みを語り合い、情報交換する会が昨年3月から月1回、県内で開かれている。障害児の母の会「K i s s Aーきっさー」。子供の行動が理解できなかったり、相談先が分からなかったり。そんな悩みに互いに寄り添い、ポジティブに生きるヒントをくれる。

◆ストレス解消に

K i s s Aの生みの親は、障害を抱える息子を育てる、介護・リハビリ商品開発会社社長、栗本薫さん（42）＝大和高田市。中学1年の長男（12）は2歳のときに自閉症、5歳のときには重度知的障害と診断された。

栗本さんは長男が3歳のときに通っていた児童福祉施設で、同じように障害児を育てる母親たちと知り合った。「うちの子すぐ壁たたたくけど、どうしたらいい？」「おねしょが止まらないの」。施設では週1回、母親同士が語らう場が用意され、悩みを気軽に話すことができた。「障害児を育てるといって暗いイメージをもたれがちだけど、そこは明るい雰囲気、話すことがストレス解消になった」（栗本さん）という。

◆親の“情報格差”

だが、長男が小学校の特別支援学級に通い始めると一転、相談相手や情報交換の場を持たずに1人で苦悩する保護者たちと出会った。通う施設や学校によって、親に“情報格差”があることに、「衝撃を受けた」という栗本さん。誰でも参加できる情報交換の場を作ろうと昨年3月、母の会を立ち上げた。「K i s s A」という名前には、「きっとすべての人にすてきな明日がやってくる」という意味と、「喫茶店のように気軽に足を運んでほしい」という願いを込めたという。

◆エンディングノート

5月下旬、大和高田市で開かれたK i s s Aには、障害児の母親や福祉施設職員など30人近くが参加し、お茶や菓子をつまみながら、日頃の悩み相談や育児の情報交換をしていた。

この日話題になったのは、自分にもしものことがあったときに、残された子供を支援してくれる人に渡すためのエンディングノート「親心の記録」（日本相続知財センター発行）。障害を持つ子供の親用に作られたエンディングノートで、子供の癖や行動、対応法などを詳しく記入するスペースが設けられている。障害児を育てる親にとって、自分の死後への不安は大きい。親たちには「記入例が詳しくてわかりやすい」と好評だった。

参加した奈良市の主婦（42）は、「同じ悩みを持っているからこそ話せることがある。何でも相談できて楽しい」と話していた。

栗本さんは「自分の中にこもらないで一歩前へ踏み出してほしい」と参加を呼びかけている。次回は今年25日に大和高田市で開催予定で、参加自由。詳細は、同会フェイスブック（<https://www.facebook.com/KissAnogisu/>）。

奇跡の笑顔 山崎理恵さんの思い「花は一気に咲く」を信じて



高知新聞 2017年7月12日
「救いの神は必ず現れる」と体験を語る山崎理恵さんと音十愛ちゃん（5月、高知市春野町の母親集会）

6月に高知新聞朝刊で連載した「音十愛12歳奇跡の笑顔」第3部（14回）の主人公、山崎理恵さん（50）＝高知市＝の手記と、彼女が重症児デイサービス施設を立ち上げるきっかけとなった社会福祉法人「ふれ愛名古屋」（愛知県）の利用者、五味美早（みさき）さん（33）のインタビューです。挑戦する山崎さんの思い、そして、重症児デイの利用がいかに家族に潤いをもたらしたか——を紹介します。

【母の手記】

去年の今ごろ、こんな大それたことを私がしているなんて誰が想像できたでしょうか。

連載第2部が終わった直後で反響のすごさにただ、驚くばかり。半面、プライバシーをさらけだした心労で髪は真っ白に。家計は苦しく、明日の生活もどうなるかも分からない状況もあり、世間の脚光を浴びるまぶしさと現実の落差にとてつもない不安を感じながら、吹く風に身を任せるしかありませんでした。

心のトゲが抜けた

そんな中で私の心の励みとなったのは第2部終了の1週間後に載った高知新聞「方丈の記」の、高知県立大学、田中きよむ教授のインタビューでした。教授は「知的障害児の父」と言われる故糸賀（いとが）一雄さん（滋賀県）の「この子らを世の光に」という言葉を引用し、〈音十愛ちゃんの果たした役割はまさにこれです。「光を当ててやらねば」と思っていた対象が実は「光になった」。高知県の特別支援教育をランクアップさせたのです〉と書いてくださった。あの一節を読んだ時、心のトゲがずっと抜けたような気がしたのです。

次女の音十愛が生まれて以来、突っ走ってきた人生。盲学校幼稚部入学を訴えて高知市の「ひろめ市場」前で街頭演説し、高知県教育委員会へも押し掛けました。そんな自分のことを他人はクレームとして捉えているのかも？ との思いがありました。けれど、あの言葉で、「良かった。自分が信じてきたことが正しかったんだ」と。自分を認めてあげることができ、次のステップを踏み気持ちは芽生えたのだと思います。

認めてもらえるってすごく大きいんです。だから、私だけでなく、同じ立場にあるお母さんたちも応援したい。「よう頑張ったね」と伝えることで階段を上がってほしい。そのためのお手伝いをしたくなったのです。

そんなところへ、新たな出会いが待っていました。名古屋で重症児デイ施設を運営する「ふれ愛名古屋」の鈴木由夫（よしお）理事長さんです。「『なければ創ればいい』と、お母さんたちを応援しているよ」と、高知出身で東京にいる障害児ママが知らせてくれたのです。あの出会いがなければこんな進展はなかったでしょう。その後の経緯は連載第3部の通りです。私の諦めきれない思いが、出会いを引き寄せ、目指す場所に連れて行ってくれたのだと実感します。

全てをさらけ出す怖さ

その意味では、この連載のきっかけとなった1年半前の高知新聞の記者さんとの出会いも運命的でした。当時は離婚から半年。私は傷心の中、故郷の香川へ帰るつもりでした。シンポジウムで体験発表したことがきっかけで取材の打診が入りました。「道草食ってもいいや」と開き直ることにしました。忘れたいことも思い出さねばならない作業は半年にも及び、つらくはありましたが、過去をきちんと振り返ることで頭の中が整理され、誤解が解け、心の荷物が軽くなったことは確かです。

そして今回の第3部の取材は5カ月間。2016年10月、仕事に復帰した私は、休日

はNPO法人の立ち上げ準備や長女の高校進学問題、音十愛の育児で忙しく正直、取材を乗り切る自信がありませんでした。

第3部の7回目、私が恥を投げ捨てて告白した「家賃滞納、電気も止まる」は、どんな目で世間から見られるのかとても不安でした。全てをさらけ出すことの壮快感と、その思いと相反する副作用のような吐き気を伴う憂うつ感。人生であれほどの経験をすることもめったにないでしょう。でも、真実を知ってもらうことで本気の思いも伝わったのではないかと感じます。

出会いの連鎖が神を呼ぶ

2016年秋以来、講演や講義に6度、招かれました。本当はあまり人前で話したくはありません。不幸を売り物にしているように思われるかもしれないし、つらかった過去を思い出すのは、身を引き裂かれるように苦しい作業です。

一方で、知っていただきたいこともありました。「出会い」は本当に突然やってくるんです。何度も経験しました。人生って波のようにいろんなことが押し寄せてきます。でも踏ん張ってしのいでいたら、必ず救いの神が現れる。大雨でも勇気を振り絞って一步を踏み出す。そうしたら、誰かが次のステージへ連れて行ってくれる。そしてまた踏ん張れる。人生その繰り返しでした。そういうことをお伝えしたくもあったのです。

講演したことで、思わぬ支援もいただきました。高知県佐川町の母親大会関係者の方々が募金活動を展開し、60万円を超す額を私たちに贈っていただけのようです。1千人以上の方が賛同してくれました。感激です。高知新聞・高知放送「生命（いのち）の基金」の助成金100万円も含めて皆さんからの浄財は総額800万円にも。信じられません。素直にありがとうございます。個人の懐には入らない仕組みになっており、すべてNPO法人の運営に充てさせていただきます。

9月開設 間に合う気配

離婚で家族がバラバラになり、息子とも一緒に暮らせなくなるなど、つらい経験もしましたが、母親としての生き方を変えたのはまぎれもなく娘の音十愛です。たくさんの出会いを通じて自分がやるべきことに気付かせてもらいました。途中で音十愛を育てることをあきらめていたら、こんな素晴らしい思いは味わえなかったでしょう。

私の好きな言葉に「花は一気に咲く」という表現があります。人生はどんな困難もあきらめず、こつこつ続けていたら、思いを共にする人たちが集結し一気に花を咲かせる。自分の経験からそう、信じます。

心配していた施設の物件探しも何とか9月のオープンに間に合いそうな気配です。生みの苦しみはまだまだあると思います。1年前、「明日」さえ不安だった貧困主婦が、踏み出す勇気を頂けたのは信頼できる仲間、そして多くの方々からの温かいご支援のおかげです。皆さまからの期待をしっかりと受け取り、輝く未来に向かって進んで参ります。本当にありがとうございました。

募金は郵便振替口座「01670-1-42920」、口座名「特定非営利活動法人 みらい予想図」。問い合わせは山崎さん（090・1326・3819）です。

川越いじめ、控訴審和解...市と少年連帯し損害金 読売新聞 2017年07月11日

川越市の市立中学校在籍時にいじめを受けていた男性（20）が、2年生だった2012年1月、同学年の少年3人による暴行で寝たきり状態になったとして、男性と母親が損害賠償を求めた訴訟の控訴審は10日、東京高裁で和解が成立した。

川越市と少年3人が連帯し、男性と母親らに、遅延損害金を含め1億9741万円を支払う。

和解後、川合善明市長が市役所で会見を開き、「教員らに安全配慮義務違反の過失があった事実を認識し、それが深刻な事件につながったと、重く受け止めている」と話した。また、新保正俊教育長は「学校だけでなく地域社会も含め、いじめや暴力の根絶に取り組ん

でいく」と述べた。

記者会見する川合市長（左）と新保教育長（10日、川越市役所で）

市では今後、学校ごとの「いじめ対策委員会」の充実を図るほか、いじめを受けたり、いじめを見たりしたとき、どう対応すべきかを教えるなどして、子供たちがいじめをなくす取り組みを行うようにしていくという。

一方、男性側の代理人の伊東毅弁護士によると、男性は5月、寝たきり状態のまま障害児施設から自宅に戻った。男性の母親は、自分が老いた後、介護をどうすればいいのか、不安を感じているという。

母親は伊東弁護士を通じて「和解は在宅介護の費用までは認められていない。何かある場合に備え、外出してもすぐに自宅に戻れるようにしているなど大変な面もあるが、息子ができるだけ長く自宅にいられるよう、介護に努めたい」とコメントした。

訴訟では、さいたま地裁川越支部が昨年12月、市と少年3人に原告への損害賠償計約1億4800万円と、治療費を負担した健康保険組合に1305万円を支払うよう命じる判決を出した。原告側は在宅介護費用が認められなかったことを不満とし、市も「学校や教員がどこまで責任を負うべきか判断してもらおう」として、それぞれ東京高裁に控訴していた。



特別支援教育、充実へ 市町担当者ら研究協議会 静岡 静岡新聞 2017年7月12日
支援体制の充実に向けて実践発表などを行った研究協議会＝静岡市駿河区



静岡県教委はこのほど、心身障害などで特別な支援が必要な子どもたちの支援体制の充実に向けた研究協議会を静岡市駿河区で開いた。市町の保健福祉、教委担当者ら約100人が参加し、実践発表やグループ協議に臨んだ。

御殿場市や裾野市で児童発達支援センターを運営する富岳会の山内強嗣理事長が実践発表を行った。2012年に知的障害児通園施設から児童発達支援センターに運営形態を変え、発達の遅れが認められる子どもを広く受け入れるようになったと説明。「2、3歳の早期から療育し、地域の幼稚園、保育園に移行する通過型の施設として、市町や幼稚園、保育園と連携を強めたい」などと話した。

グループ協議では、特別な支援を必要とする子どもを地域で育てる体制を巡って意見交換し、関係機関の縦横の連携の重要性を確認した。

性犯罪厳罰化 110年ぶり大改正 課題は? FNNニュース 2017年7月12日



今週、2つの大きな法律が施行される。まずは11日、「テロ等準備罪」が新設された、改正組織犯罪処罰法が施行された。そして13日には、改正刑法が施行される。110年ぶりに改正された刑法だが、まだまだ課題も多い。

安倍首相は「民法、刑法について、それぞれの分野で、1世紀ぶりとなる、歴史的な改正が行われました」と述べた。

110年ぶりに、性犯罪規定が大幅に改正された刑法。

性犯罪の一部厳罰化や、被害者規定の見直し、さらに、親などの「監護者」が18歳未満への性犯罪に及んだ場合、暴行や脅迫がなくても罰せられることなどが盛り込まれた。

そんな中、「わたしが思うのは、『いったい誰が、わたしたちのために、何をしてくれるん

だろう』ということです」と話すのは、山本 潤さん。

成人になるまでの7年間、父親から性的虐待を受けていたという。

山本さんは「実際に遭ったその人たちが救われる改正を、実現できるかということが、本当に大事な課題だというふうに思っています」と話した。

山本さんは、改正された法律でも、まだカバーできていない、性犯罪被害者の実態に、目を向けてほしいと訴えている。

内閣府のデータを見ると、被害者が周りの人に相談できない実態が浮かび上がってくる。

そこには、性犯罪被害者を守るための法律があっても、実際の捜査のあり方を改善しなければならぬという現実があった。

こうした被害者たちの力になればと、インタビューに応じてくれた女性がいる。

2年前、男性から性的暴行を受けたと訴えた詩織さん。

この暴行について、男性は不起訴となったが、彼女はこの処分を不服として、検察審査会に審査の申し立てを行っている。

詩織さんは「話さなければ始まらないし、どこまで話せば、本当に変えようと動いてくれるんだろう。究極の選択だったかもしれないけど、これが、わたしの選択でしたね」と話した。

詩織さんは、自らの経験を通じて、広く考えてもらうきっかけを作りたいという。

詩織さんは「(もともとは、性犯罪に遭った時の、ある程度の知識はあった?)全くなかったですね。そのことにも、自分を責めました」と話した。

その日、詩織さんは、ぼう然としたまま、当時住んでいた自宅に戻り、全身を洗い流したという。

その後、婦人科へ向かった。

詩織さんは「緊急のことなのでということで、入れていただいたんですけど、診察室に入ったんですけど、椅子に座った途端に、『何時に失敗されちゃったの?』、『じゃあ、これ(モーニングアフターピル)外で飲んで』という形で、息をつく間もなく、話せるタイミングも、目を合わせた瞬間もないような状況だったんですね。どうして緊急なのかというところに、一度、先生方にも、そこで考えてほしいなと思うところがあって、そこでチェックシートなどあれば、YES/NO だけで済めば、そこで性暴力の実態がわかるんじゃないかなと、まず1番にわかるんじゃないかなと思います」と話した。

さらに、詩織さんは「『難しいから、諦めなさい、やめなさい』、『君のためにはならない』と言われたんですね。警察の方が意地悪を言っていたりとか、(捜査を)やりたくないってことではなくて、本当に、その当時の法律では難しいから、『君のためなんだ』ということだと言っていたと思われるんですね」と話した。

詩織さんを突き動かした理由の1つが、彼女が警察署で受けた、納得のいかない対応だった。

詩織さんは「女性の婦人警察官の方と、お話しすることができたんですけど、2時間ほど、やっと、いろいろ思い出しながら、全てを語ったあとに、『申し訳ないですけど、わたしは交通課なので、ほかの警部補を呼んでくるので、その方に話してください』って言われて。1番嫌だったのが、大きな人形を使って、当時をデモンストレーションしないと、再現しなければいけない時は、本当に、すごくつらかったです」と話した。

こうした警察の対応に、深く傷ついたという。

詩織さんは「いろいろな捜査のやり方があったんですけど、そこが改善されないからには、(解決)できないと思うんですね。自分(のこと)に置き換えて、自分かもしれないし、自分の親友かもしれないし、自分の娘かもしれない、自分の息子かもしれない、そう思ったときに、もしも、『被害者にも落ち度があったんじゃないか』という言葉が浴びせてしまったとしたら、その言葉を発してしまったがゆえ、その子が言えなくなってしまう環境を作ってしまったというということも、理解していただきたいんですね」、「(改正されても)今の法律ではと思うと、やはり難しいところがあると思いますね。ただ、その法律だけじゃなくて、

周りの人たちの受け入れ方が、まず第一だと思うので、そこで、法律でどうならなくても、まず自分の身に置き換えて、それが1番考えてほしい点ではありますね」と話した。

13日から施行される改正刑法。

規則には、施行3年後の見直し規定が盛り込まれる。

今回の改正は、大きな1歩となるが、より実態に沿った改正や、1人でも多くの被害者が相談しやすい社会にするための取り組みが求められる。

玉野で23日「うまれる」上映会 有志準備「多くの人と感動共有」

山陽新聞 2017年7月11日



映画「うまれる」の自主上映会に向け準備する上映委員会の古野さん（手前左）ら「うまれる」の自主上映会をPRするちらし

ドキュメンタリー映画「うまれる」（2010年製作、豪田トモ監督）の自主上映会が23日、玉野



市の荘内市民センターで開かれる。命の大切さ、家族の絆がテーマ。有志の上映委員会が準備を進めており、「重いテーマだが、前向きで明るい展開。見終わった時に温かい気持ちになる。感動を多くの人と共有したい」としている。

映画は、両親の不仲や虐待の経験から親になることに戸惑う▽染色体疾患の18トリソミーの子どもを育てる▽出産予定日におなかの子を亡くした▽不妊治療の末、子を授からない人生を受け入れた—という実在する4組の夫婦を追う。

自主上映会を企画したのは、市内の訪問看護ステーションに勤める作業療法士古野剛さん（47）＝倉敷市。4年ほど前、次女が小学校でちらしをもらい、親子で鑑賞。今年映画のウェブサイトを見て、開催を思い立った。

職場の同僚や周辺の医院、薬局などに協力を求め、玉野「うまれる」上映委員会を2月に結成。日程調整、会場探し、ポスター作りをしてきた。荘内地区の学校などにちらし、店舗にポスターを配布した。

4日、メンバー4人が集まり、役割分担などを確認した。二宮崇さん（41）＝同市＝は「子育てをしている人や、出産を控えている人にとっては特に考えさせられる内容では」。坂本晴貴さん（24）＝倉敷市＝は「いろんな家族の形があるということを感じる」と話す。

上映は午前10時（ママさんたいむ）からと午後1時半から。ママさんたいむでは「子どもの泣き声はBGM」として、気にせず見られる。授乳、おむつ交換のできるベビールームでも同時に上映する。

事前予約すれば一般800円、小中高生500円。当日はいずれも千円。6歳以下は無料。各回とも定員200人（申し込み先着）。20日まで事務局（訪問看護ステーション ママック内）がファクス（0863-73-5081）かメール（umareru.tamano@gmail.com）で受け付ける。

地域福祉へ包括協定 先端大・金城学園・北伸福祉会 連携

中日新聞 2017年7月12日

まず介護士のユニホーム作り

北陸先端科学技術大学院大（能美市）と金城学園（金沢市）、県内で高齢者福祉施設「朱鷺（とき）の苑」を運営する社会福祉法人北伸福社会（同市）は十一日、地域福祉の推進などに向けて連携、協力する包括協定を結んだ。同会の介護士らのユニホーム作りをはじめ、地域活性化に向けて互いに協力していく。

協定書に署名した（左から）小松栄子理事長、浅野哲夫学長、加藤真一理事長＝白山市の金城大で産官学の連携を進める取り組み「マッチング・ハブ」の一つとして、北陸先端科学技術大学院大が金城学園と北伸福社会を仲介した。協定では、地域づくりへの貢献や人材の育成、地域福祉での学術研究・社会活動の推進などでの連携、協力を盛り込んでいる。

第一弾として金城大短期大学部美術学科がデザインなどを担当して、介護士らのユニホームを作る。これをきっかけに福祉分野での総合的デザインの共同研究、若者の地域定着や女性の社会進出に関する取り組みでも連携していく考えだ。

白山市の金城大笠間キャンパスであった締結式では、北陸先端科学技術大学院大の浅野哲夫学長、金城学園の加藤真一理事長、北伸福社会の小松栄子理事長が、協定書に署名した。

浅野学長は「今回の協定を機に協力関係を深め、地域を通して成果を全国に発信できれば」、加藤理事長は「金城大には社会福祉学部があり、今後も協力を進めたい」、小松理事長は「新しいユニホームで福祉業務のマイナスイメージを払拭（ふっしょく）していければ」と語った。（鴨宮隆史）



ラーメン党、常設店できた きょう益城町にオープン 熊本日日新聞 2017年7月12日
九州ラーメン党の常設店の落成式で、ラーメンを振る舞う濱田龍郎理事長（左後ろ）と招待客ら＝11日、益城町
九州ラーメン党が障害者の就労支援施設を兼ねて設けた店舗＝11日、益城町



益城町のNPO法人九州ラーメン党（濱田龍郎理事長）

が名物の豚骨ラーメンを扱う常設店を12日、同町古閑にオープンする。ラーメン党は長年、全国の被災地で炊き出しに奔走し、地元では障害者支援に尽力。店は障害者の就労を支援する作業所を兼ねており、「障害者が生き生きと働き、熊本地震からの復興に貢献する場にしたい」と意気込んでいる。

ラーメン党は2000年に弁当やクッキーなどを製造・販売するそよかぜ福祉作業所を同町福富に設け、昨年2月にはラーメン店も併設した。しかし熊本地震で被災したため、九州自動車道の側道沿いにある現在地に本格的なラーメン店を開くことになった。

11日に同店であった落成式には約40人が出席し、ラーメンが振る舞われた。濱田理事長（73）は「地震から1年3カ月での開店は奇跡。障害者支援と災害救援の拠点を目指す」、配膳を担当する作業所利用者の村上貴裕さん（37）は「働くのが楽しみ。みんなが笑顔になる店にしたい」と話していた。

店舗や厨房「ちゅうぼう」機器は、日本財団の障害者就労支援プロジェクト助成金を活用して整備した。営業は午前11時～午後3時と午後5～9時。月曜休み。九州ラーメン



党TEL096(287)8223。(小多崇)

社会参加へカフェで交流を 京都に「カタリバ」 京都新聞 2017年7月12日



オープンカフェで、障害者の雇用状況を説明する企業関係者（京都市中京区・スマイルプラス烏丸御池センター）

障害のある人たちへの就労支援に取り組む「スマイルプラス烏丸御池センター」（就労移行支援事業所）が月1回、京都市中京区の事務所を開放して「オープンカフェ～自分史のカタリバ」を始めた。お茶を飲みながら支援員らと話をし、楽しく交流を図っている。

同センターは利用者からの相談を受ける中で、就労を意識するとプレッシャーを感じる人や、幼少期のいじめや学校職場での不

適応でひきこもりがちで孤立する人が多いことに気づき、気軽に来れる場をと、4月からカフェスタイルの交流を始めた。対象は障害の有無に関係なく、ひきこもりや当事者を支える家族など誰でも可。

6月には当事者のほか、行政や医療、支援機関の関係者ら25人が出席した。障害者を雇用している企業講話を初めて取り入れ、飲食業「LIPTON」などを経営するフクナガ（中京区）の村田正之総務部長が会社概要や障害者の勤務内容を説明。出席者からは「精神疾患があるが病名を職場でどこまで開示するのか」「障害者を雇用した経緯は」などと熱心に質問が出た。

講話後は4人グループに分かれてコーヒーや紅茶を飲みながら自己紹介。ワークショップで意見を出し合い、発表して交流を楽しんだ。同センターの柳澤洋行さん（32）は「まずはカフェに来る目標を立ててもらえるだけでもいい。支援員を知ってもらい、将来的な社会参加、就労へとつながれば」と話す。

毎月最終週の金曜に開催。次回は7月28日午後2時から。飲食代100円。定員約20人で事前申し込み制。申し込みは同センター075(254)7060。

<金口木舌>チムグリサンの心 琉球新報 2017年7月12日

飯時を逃すと、大正生まれの祖母に「ひもじくないか」と聞かれることがあった。戦前や戦後、食で困った経験がある人が「ひもじい」と言うと、厳しい空腹が心底伝わるような気がした▼福祉関係者から「夏休みを嫌がる子がいる」と聞いた。家でご飯があまり出ず、給食に頼っているからだという。困窮支援は活発になったが、支援から漏れる子どもがいる。困窮を隠して支援を求めない子もいるという▼沖縄市社会福祉協議会のフードバンクには、市民が自治会を通じ米や缶詰などを持ち寄る。NPOのセカンドハーベストとの連携で始めて10年目。製造業者からの持ち込み中心ではなく、地域が主体の活動は全国でも珍しかった▼市社協の金城和彦事務局長はフードバンクの意外な成果として「食べ物を必要としている人を見付けることにつながった」と話す。活動が知られ、必要とする人につながる例が増えた▼「寄付」ではなく「おすそ分け」が活動の肝。自分も満たされているわけではないが、分けなければ心が痛むという「チムグリサン」の精神だ。沖縄福祉の母・島マスさんが、大切にしたい沖縄の心のありようとして挙げた▼「夏休み」と聞くと心待ちではなく、ひもじさに気を煩わせる子どもがいる。小さなことであっても何かできることがある。それを忘れずにいることが、子どもたちの笑顔につながる。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行